



《発行所》

青山同窓会

〒951-8127新潟市関屋下川原町2-635

新潟県立新潟高等学校内

TEL 025-266-5268

FAX 025-266-5268

《編集、発行人》

上村光司

《印刷所》

オリオン印刷機

〒950-0963新潟市南出来島1-19-1

TEL 025-283-2151

FAX 025-283-3804

ごあいさつ

会長 上村光司 (50回)



応援歌集の作成に着手

昨年十月二十日に母校の校舎竣工と合わせて創立百十周年の記念式典を挙行しましたが、正確には今年が百十周年になります。記念事業については、皆様から大変な協力をいただきました。世の成り行きいかかがか、ヘン曲がりは古い古い唱歌の一節「木の下蔭に駒とめて、世の行く末をつくづく」と、忍ぶ鎧の袖の上に、散るは涙かはた露か」などと口ずさみたくもありませんが、ここはやはり「明るさを求めて暗さを見ず」と行きたいものです。皆様健康に留意、ご活躍をお祈りします。

百十周年記念の関連では、同窓会名簿の作業が進行中です。十年ごとに作って来ているものですが、消息のわからぬ方の調査など、ご協力いただければ幸いです。

このほか応援歌集の作成に着手します。同窓の心をつなぐ応援歌も、時の経過とともに歌われなくなつたものがあります。し、歌詞や曲調に異同・変化も見られます。応援歌は口伝えに歌い継がれて来ましたので、その時代時代の感覚を加えて変化するのは当然ではあります。が、やはり原典はしっかり記録しておきたいと思つています。

このことについては、数年前にこの会報で触れたところ、当時早速にいろいろとご教示をいただいたりしていましたが、作成には相応の経費がかかるので、百十周年記念事業の成り行きを見てからと、延び延びにされて来ましたが、作成のための具体的なことは早急に決めますが、応援歌誕生の経過、元歌の存否など、ご存じのことを同窓会事務局に寄せていただきたいと思います。

斎藤英四郎さんのこと

経団連の元会長で東京青山同窓会名譽顧問の斎藤英四郎さん(36回卒)が四月二十二日に亡くなられました。この会報にも特にご関係の深かつた方々から追悼の言葉を頂戴しています。が、私も少々付け加えさせていただきます。

ご逝去の約一週間後、五月一日付新潟日報の「窓」欄に、「故郷を愛した斎藤英四郎さん」という投書が載りました。筆者は昭和三十一年当時、県病院局

の係長だった人で、「新発田病院の工事が鉄材価格の暴騰で出来なくなつた。安い配給鉄筋を求めて万策尽き、副知事級の人でないといえないよと聞かされたが、必死の思いで八幡製鉄の営業部長室に名刺を出した。私も新潟もんですといわれ、初めて県人と知つたが、故郷のためならぜひお役に立ちたいと、すぐに電話で話をまとめた。だいた」というものでした。

昭和三十一年といえば、母校の前々校舎が焼失したのが昭和二十九年四月です。鉄筋校舎で再建したいと復興期成会が懸命の運動を続けていました。期成会長(同窓会長)の鍵富清一郎さんらが、すでに八幡の営業部長だった斎藤さんに助けていただいたという話を、私は風の便りに聞いたことがあります。斎藤さんは、自らそのことを語ることはありませんでしたが、

斎藤英四郎さんは四年前にこの文の冒頭で借用した「明るさを求めて暗さを見ず」と題した本を出版されました。日本経済新聞の「私の履歴書」をはじめ新聞雑誌に書いた言行録をまとめたものですが、その中に「昔・今・これから」と母校百周年記念式で講演された、その全文が掲載されているのです。講演は数多くなされたでしょう

に、この本におさめられた講演は、他には「ドレスデン工大大 学名譽学位授与式の記念スピーチ」だけであります。斎藤さんにとって、母校での講演がどんなに重いものであつたか。全文八千字を越えるその講演に幾度推敲(すいこう)を

重ねられたのか。綺羅を飾る言葉は一つもなく、ひたすら人類普遍の愛と平和共生の理念を説くものでした。

真つすぐな太い幹から円く枝を伸ばしたような、本当に「巨大な人」だった、その笑顔を思い返しています。

変化する時代にも、

ゆるぎないネットワーク

副会長 福田実 (75回)



代に直面しながら、同期生は、それぞれの組織の第一線で責任者として活躍したり、あるいは、独立創業への挑戦をしたりなど、人生の転機を迎えつつあります。

昨年より、同窓会副会長の大きな変化の中で、最近づくづく実感するのが、同期生のネットワークの素晴らしさです。それは、健康管理のノウハウ交換に始まり、各組織の第一線で働いているからこそ得られる、実態情報に基づいた意見交換にまで及んでいます。つまり、久しぶり酒を酌み交わしながら、これからの企業戦略、あるいは、これから始めようとする新規事業に対して、「自分の小売業界では、こういう動きがある」「建設業界では、こういう二

お願ひします。

さて、われわれ七十五回同期生は、新潟地区では同窓会総会時のほか、帰省時期に合わせて八月と十二月に同期会を開催しています。一九六七年の卒業以来、早三十五年過ぎ去り、IT化やグローバル化、地球環境問題への対応など、学生時代には想像もし得なかつた激動の時

ズが生まれつつある」「自分の
 こういうニーズに、対応し得る
 企業がなかった」「自分が駐在
 していたアメリカでは、こうい
 う商売が流行り始めた」「他都
 市では、こういう地域おこしが
 模索されつつある」「市町村合
 併により、こういう動きが出る
 だろう」などなど、それぞれの
 異業種の立場から、生の最新情
 報や課題に対するアドバイスを
 提供してくれました。

私も含めて参加者は、その議
 論の過程で、時代の風や人々の
 ライフスタイルの変化の一端を
 教えられたり、企業が果たすべ
 き社会的な使命を再認識させら
 れます。

我が新潟高校は昨年、めでた
 く新校舎の竣工と創立一一〇周
 年を迎えることができました。
 しかし、一世紀を越える重き伝
 統は、ややもすると、前例に倣
 うなどして、新しい発想を阻害
 する恐れがあります。新潟高校
 校歌に「古き誇りを新しく」と
 あるように、良き伝統のもとに、
 常に新しい発想や感性を取り入
 れていく必要があります。

若き日、青陵健児としてチャ
 レンジし続けた姿勢を忘れるこ
 となく、時代の潮流を踏まえ変
 化の本質を見据えたうえで、わ
 れわれ同期生も、この世代だか
 らこそ描ける夢を抱き、その実

現を強く念じ、果敢に挑戦する
 ことで、激動の時代に価値ある
 人生を築き上げていきたいもの
 だと思います。全国で活躍する
 七十五回同期生諸君、人生はこ

追悼

斎藤英四郎先輩に捧ぐ

東京青山同窓会名誉会長

斎藤伸雄 (44回)

東京青山同窓会前名誉会長
 藤英四郎先輩、永年御指導あり
 がとうございました。

会合にはお忙しい中を毎回御
 出席いただき、いつも私達後輩
 に明るく笑顔で人生の指針をお
 話しいただいた。

御自身の著書の中に次の一節
 がある。

「つらつら思うのに一生のう
 ち大小の禍福があった。しかし
 振り返って見ればいづれも走馬
 灯の一こまにすぎなかったこと
 に気付く。これが人生の終着点
 に近くなったの本当の心境であ
 る。じたばたするな。あるがま
 まの人生を生きよう。」

明るさを求めて暗さを見ず。
 過去を忘れ、希望に満ちた未来
 を期待して前進することだ。」
 真言有響。これが先輩の信条で
 ある。

明末の碩学、呂新吾の「呻吟
 語」の一節に次の言葉がある。

れからが勝負、高い志を掲げべ
 ストを尽くしましょう。
 最後に、青山同窓会会員の皆
 さんの今後益々のご健勝とご多
 幸をお祈り申し上げます。

「深沈厚重ナルハ是レ第一等
 ノ資質。(だまつて相対しただ
 けでぐつとひきつけられる魅
 力)

天下ノ大事ヲ弁ズルハコノ人
 ナリ」とある。斎藤先輩は第一
 等の資質、正にこれである。

人生は老後にある。文学には
 余情、音楽には余韻。絵画には
 余白があつてこそ文学も音楽も
 絵画も美しいのである。

「人ヲ看ル、ソノ晩年ヲ看ヨ」
 は葉根譚にある名言である。正
 に先輩は年とともに円熟し、老
 いて佳境に入るで誠に見事な御



一生であつたと思う。
 心から敬意を表し、あらため

追悼

斎藤英四郎君の憶い出

今井二雄 (36回)

斎藤英四郎君と私は旧制新潟
 中学では同学年しかも大体同じ
 クラスだった。特別の交友関係
 だったわけではないが、後年に
 至つて彼が平成十一年上梓した
 「明るさを求めて暗さを見ず」
 と題する著作に見る如く、まこ
 とに明朗な生徒で又当時として
 は珍らしく英語が大好きだった
 ことを憶えている。

そして我々の学年から昭和三
 年、四年修了で旧制新潟高校に
 進学し得たのは文科5・理科5
 の計10名だったが、彼は文科、
 私は理科の一人として名を連ね
 ることが出来た。

その昭和三年に全国から旧制
 新潟高校を目指して入学した者
 の平均年齢が還暦に達する頃
 なつてから、どうしたことか学
 年を通じての親睦会の如きもの
 が生れた。忽論ある程度有志に
 限られたものだったがこのよう
 な文理科を通じての会合は珍ら
 しく、毎年一回どこかの名所に
 集り楽しむのを常とした。私は
 毎年のように列席したが斎藤君

て御生前の御恩義に感謝申し上
 げお別れの言葉といたします。

はそうもゆかぬらしく、たまの
 出席では久闊を叙したものであ
 る。その他稀ではあるが東京方
 面での旧中学の同同学年会で顔
 合せたり、経団連本部を訪ねて
 快談したこともあった。

後日私が古稀記念として刊行
 した「陸海空うろつ紀行」に序
 文を頼んだところ快諾。

「今井二雄君とは同じ新潟中
 学のクラスメイトである。その
 後六十年間、進んだ途も違い、
 お互顔を合せることは稀だつ
 た。

同君の戦前・戦中を通じて各
 地を転々とし、波乱と変転の体
 験を重ね、戦後は持前の探求心
 を遺憾なく発揮、国内はもとよ
 り、世界各国を飛び回つてきた
 これ迄の人生は、戦争を挟んで
 生き抜いてきた我々同世代に共
 通する感動を呼び起こすとも
 に、次代の人々にも少なからず
 人生の示唆を与えてくれるもの
 と思う。
 ……………」



と過分の推挙文を書いてくれ
 た。

その後のことになるが、前述
 同君の「明るさを求めて暗さを
 見ず」を讀んでビックリ仰天し
 たことがあった。私は戦中、短
 期現役の海軍々医科士官として
 活動したが、大学卒業後数年に
 亘り研究室に在つて学位取得
 後、海軍に入つたので同期の平
 均年齢から見れば上の方だつ
 た。

そして海軍士官としての躰け
 教育のため横須賀の海軍砲術学
 校で、軍医科士官としての軍陣
 医学習得のため東京の海軍々医
 学校で、夫々訓練と教育を受け
 た。その同期の桜とも言うべき
 仲間斎藤孝君という人物が居
 たのである。その孝君が英四郎
 君の実弟だったことを前記彼の
 自叙伝を讀んではじめてさとり
 驚いた次第であるが、既にかな
 り以前に他界し語り合うべきす
 べも無い。

しかし考えてみると姓が今井等ならまだしも、石ころの転がっているような齋藤、しかも英四郎と孝ではあの忙わしい連日では連想の及ぶ余地などなかったのも無理はない。早速英四郎君に委細を報告したところ彼もいたく残念がり、私の手紙は弟・孝君の遺家族の方へ廻したこと、又孝君の海軍時代の思い出など詳しく書いて寄越してく

追悼
故 齋藤英四郎先輩を偲ぶ
東京青山同窓会会長
栗林貞一 (59回)

われら青山の最も尊敬する大先輩齋藤英四郎氏が四月二十二日に逝去された。享年九十才。痛恨の極みである。心から哀悼の誠を捧げたい。齋藤先輩は明治四十四年にお生まれになり、旧制の新潟中学校を卒業(三十六回)。新日本製鉄、経団連等を軸にご活躍され、戦後のわが国経済発展の中心的存在であった。齋藤先輩は晩年日本経済新聞に「私の履歴書」を連載し、それを中心に書物にまとめられた。その書名は「明るさを求めて暗さを見ず」いつも過去を早く忘れて希望に満ちた未来を期待して前進することだという。齋藤さんに直接接すると、この



そうかなど。齋藤さんは自分のデスクから立ち上って、ソファまで来られ、座りなさいと勧められる。さっと手帳を取り出し、「うん、もう予定に入れてある。大丈夫だ。」などといった喜ばせて下さる。

方はそのような心で人生を生きてこられたのだなということを感じ、いつも教えられることが多い。東京青山同窓会では年二回大きな集まりがある。六月の新人歓迎会・講演会と十一月の総会である。そのちょっと前に齋藤英四郎先輩を新日鉄の名誉会長室に訪ねる。最近の体調はどうか? 今度の会合にはご出席でき

ところが昨年秋に訪れたときは、自分のデスクで、椅子に腰かけたまま、お話をされた。「どうなんですか。お体どうも具合の悪いところはないんでしょう?」とお聞きすると「うん、しかし年だからね。」と笑っておられた。でもそれ以降気になっていたのだった。



ところが昨年秋に訪れたときは、自分のデスクで、椅子に腰かけたまま、お話をされた。「どうなんですか。お体どうも具合の悪いところはないんでしょう?」とお聞きすると「うん、しかし年だからね。」と笑っておられた。でもそれ以降気になっていたのだった。

は、簡単なごあいさつをお願いする。貴重なお考え、知識、経験から語られる話は有益で面白い。しかし涌くが如き思い出と発想によるお話はどうしても長くなる。私の方から時間の都合があるので短かくお願いしますという。齋藤さんは相当長い時間話をされてから、「先程短かく短かくといわれたけれど、まあもう少し……」とユーモアたっぷりに、にこにこしながら話を続けられる。同窓会にしかない本当に楽しい雰囲気であっ

は、簡単なごあいさつをお願いする。貴重なお考え、知識、経験から語られる話は有益で面白い。しかし涌くが如き思い出と発想によるお話はどうしても長くなる。私の方から時間の都合があるので短かくお願いしますという。齋藤さんは相当長い時間話をされてから、「先程短かく短かくといわれたけれど、まあもう少し……」とユーモアたっぷりに、にこにこしながら話を続けられる。同窓会にしかない本当に楽しい雰囲気であっ

は、簡単なごあいさつをお願いする。貴重なお考え、知識、経験から語られる話は有益で面白い。しかし涌くが如き思い出と発想によるお話はどうしても長くなる。私の方から時間の都合があるので短かくお願いしますという。齋藤さんは相当長い時間話をされてから、「先程短かく短かくといわれたけれど、まあもう少し……」とユーモアたっぷりに、にこにこしながら話を続けられる。同窓会にしかない本当に楽しい雰囲気であっ

た。近親者だけという告別式、ホテルニューオータニでのお別れの会に出席し、生涯にわたる多くの写真や遺品を拝見し、国内はもちろん国際的にもそのご活躍の広さと深さにあらためて感じ入った次第である。わが青山にこのような偉大な先輩がおられることを誇りに思い、皆で今後の精進と社会への貢献を誓うこととしよう。合掌

追悼
“团长” 先生逝く
小林智明 (60回)

徒の恐怖であり、後年のよき思い出として語り草となった。先生はわが青山の自由の校風を深く愛され、孜孜として我ら生徒に教えられたことは皆よく理解していた。先生が退職された時、我らは先生と、同時に退職された沢山、岩野、石本の四人の恩師を、越後湯沢温泉の白銀閣にお招きして謝恩の同窓会を開催した。その時の先生のご挨拶に、「孟子曰く「天下の英才を得てこれを教育するは第三の楽しみなり」と、我ら昔の生徒を持ち上げられて万雷の拍手が鳴り、瞬時にして二十年前の懐かしい青山の昔に帰ったことが今も忘れられない。その折の先生の詩に

徒の恐怖であり、後年のよき思い出として語り草となった。先生はわが青山の自由の校風を深く愛され、孜孜として我ら生徒に教えられたことは皆よく理解していた。先生が退職された時、我らは先生と、同時に退職された沢山、岩野、石本の四人の恩師を、越後湯沢温泉の白銀閣にお招きして謝恩の同窓会を開催した。その時の先生のご挨拶に、「孟子曰く「天下の英才を得てこれを教育するは第三の楽しみなり」と、我ら昔の生徒を持ち上げられて万雷の拍手が鳴り、瞬時にして二十年前の懐かしい青山の昔に帰ったことが今も忘れられない。その折の先生の詩に

徒の恐怖であり、後年のよき思い出として語り草となった。先生はわが青山の自由の校風を深く愛され、孜孜として我ら生徒に教えられたことは皆よく理解していた。先生が退職された時、我らは先生と、同時に退職された沢山、岩野、石本の四人の恩師を、越後湯沢温泉の白銀閣にお招きして謝恩の同窓会を開催した。その時の先生のご挨拶に、「孟子曰く「天下の英才を得てこれを教育するは第三の楽しみなり」と、我ら昔の生徒を持ち上げられて万雷の拍手が鳴り、瞬時にして二十年前の懐かしい青山の昔に帰ったことが今も忘れられない。その折の先生の詩に

とあり、後で色紙に書いていただいて大切にしている。若い頃から先生はいつも学問の御研究が日常であられた。書道誌「蘭亭」の創刊(昭和二十四年)や、良寛研究、郷土の文人墨客の研究に精進され、「良寛詩集」「良寛歌集」をはじめ数々の良寛研究の著書、更に館柳湾、巻菱湖、菅江甘露、會津八一などに関する著書など、遺された功績と恩恵は、百年の後に益々その光を輝やかしいものにするであろう。

先生の学殖の深さは、青山の教務室に居られる頃から、すでに校長を始め他の先生方も皆認めるところであったと聞いている。小生も個人的には前後七回先生の中国旅行にお供して、行く先々で先生の学問の深さに驚嘆尊敬の念を抱き、多くの教えを受けたものであった。現地のガイドさんなども、終には先生に教えを乞うなど珍らしいことではなかった。

そのような先生に旅行のお供も叶わなくなり、教えを乞うこともできなくなったことは、闇夜に光を失ったようなもので深い悲しみに堪えられない思いである。人の世の無常を感じながら今はただ先生の御冥福を祈るのみである。

白銀閣上白銀飛
四月猶看臘月残
衆弟衆師團酒坐
歡談讞々旧時帰

東京青山同窓会 平成14年新人歓迎会講演会報告

故人をしのび新しきを迎える

重野康人(68回)



平成14年の新人歓迎会講演会が、6月21日、東京・赤坂の東京全日空ホテルで開かれた。会場には、4月に亡くなられた偉大なる先輩、斎藤英四郎さんへの追悼の念と、新しい会員を迎える若やいだ雰囲気が入り交じり、悲喜こもごもの歓迎会となった。

この日の会には、今春、母校の新潟高校を卒業して上京した新人7人をはじめ、100人近い会員が集まった。また新潟からは、青山同窓会の上村光司会長をはじめ3氏と、ことしの卒業生を担任した木村正史先生など3人の先生が来賓として出席された。

***追悼**
初めに栗林貞一会長の提案

で、斎藤英四郎先輩を悼んで全員で黙とうし、「冥福を祈った。また、青山同窓会の上村会長はあいさつの中で、斎藤先輩をすくすくとした大木に例え、「その姿を思い返し、寂しく思う。」と、しのばれた。斎藤先輩は明治44年生まれ、旧制新潟中学校の36回卒業生(北蒲原郡安田町出身)で、新日本製鉄の社長、会長、経済団体連合会の会長を歴任し、日本の経済界の指導者として活躍する超多忙の中、東京青山同窓会の名誉会長も引き受けてくださるなど、我ら東京青山同窓会の精神的支柱とも言える存在であった。

***歓迎**
歓迎会では黙とうに続いて、栗林会長が、「東京青山同窓会



は多士済々、互いに親睦を深め、仕事も協力し合っている。」と述べ、新人諸君も気軽に仲間に加わるよう呼びかけた。また、来賓の木村先生は、「110周年記念として建設が進められてきた新校舎がすべて完成し、グラウンドも整備されて、ことしは大きなスケールで青陵祭(運動会)を行うことができた。」と、母校の近況を報告された。

***講演**
68回卒業で、元警視庁捜査一課長の寺尾正大氏が「犯罪捜査、そして我が友」と題して講演を行った。この中で寺尾氏は、殺人、強盗、放火などの凶悪事件を専門に、捜査活動に携わってきた経験を踏まえ、「現在の犯罪捜査は、多くの捜査員を動かし、組織捜査で、組織を動かす優れた指揮者を必要としている。捜査指揮者には実務・経験の積み重ねが必要だが、良い指揮者になるには経験を重ねるだけではなく、経験したことを単なる経験に終わらせず、その経験を自分で「質の良い経験」に変えて蓄積してゆくことが大切だ。」と捜査一筋の人生経験を



語った。
講演ではまた、自分が担当した犯罪捜査の過程で出会った「友人との触れ合い」をユーモアを交えて話した。そのひとつは昭和56年のロス疑惑。この事件では、新潟高校の同期生である経営診断士の小日向信光さん(68回)に頼んで、被告の店の経営状態を調べてもらった。小日向さんは徹底的に調べて、店が破産寸前に陥っていることを突き止め法廷で証言してくれた。そこまでは良かったが、ふたりが高校の応援団のリーダー仲間だったことを弁護側が知っており、法廷でその点を追及される羽目になり大いにあわてたとのことである。

また、同じロス疑惑の捜査の際に「中学校の同級生(中央高校卒)がロサンゼルスでクラブを経営しており、日本人街の状況にも詳しい。」と、同期の友

人が話していたことを思い出して、国際電話で連絡を取り合っていた。いろいろと協力してもらった。渡米して現地で捜査に当たった際には、加熱するマスコミの目を隠すため、彼女の家を捜査員の集合場所や休憩場所として利用させてもらったと、「初めて明かす」取って置きの裏話を披露した。

一方、平成7年3月に起きた、オウム真理教による地下鉄サリン事件では、同期の友人、鈴木裕徳さん(68回)が被害にあつたことを紹介した。鈴木さんは地下鉄の車内で事件に遭遇して意識不明の重体に陥り、一命は取り留めたものの、今なお後遺症に悩まされている。寺尾氏は捜査一課長として陣頭指揮に当たる中で鈴木さんが被害にあつたことを知ったという。寺尾氏

は身近にサリンの被害者がいることを同窓の我々に知らせることによって、一般人を巻き込んだ無差別大量殺人とも言える、この事件の恐ろしさをあらためて訴えたかったようだ。

***懇親**
歓迎会講演会に引き続き行われた懇親会では、斎藤伸雄名誉会長の音頭で乾杯したあと、先輩後輩、同期生同士など、それぞれに歓談し、思い出話に花を咲かせたり、近況を報告しあったりして、和やかな一時を過ごした。中には親子どころか、おじいちゃんと孫ほど年齢差のある人たちが仲良く会話する風景も見られた。最後に恒例の新潟中学校校歌「玲瓏の天：」、新潟高等学校校歌「百里流れて」、「応援歌「丈夫(ますらお)の」」を高らかに合唱し、高揚した気分そのままに散会した。



また、同じロス疑惑の捜査の際に「中学校の同級生(中央高校卒)がロサンゼルスでクラブを経営しており、日本人街の状況にも詳しい。」と、同期の友

東京青山同窓会 二〇〇二年度新人歓迎会・講演会

ワールドカップ開催期間中の6月21日(金)東京全日空ホテルで東京青山同窓会が開催されました。会長栗林貞一氏(59回)の挨拶の冒頭、同窓会に長年に寄り与されてきた斉藤英四郎氏を偲ぶ黙祷を行い、会が始まりました。

講演会は「犯罪捜査、そして我が友よ」と題して、寺尾正太氏(68回)、元・警視庁捜査一課長)が、三浦事件・オウム地下鉄サリン事件の陣頭指揮をとられた経験から、組織の指揮者としての資質と友人の大切さをユニモアを交えて話され、出席者に深い感動を与えると同時に、会の雰囲気非常に和やかなものにして下さいました。

続いて新人コールのあと、110回生を代表して鈴木雄太君が先輩の中、緊張しながらも新人らしいフレッシュな挨拶をしました。今年も、新潟から卒業学年の担任であった山田、木村、

教育実習

五月二十七日から六月八日まで

坂内香織 (107回)
での二週間、私たちは母校、新

潟高校で教育実習をさせていただけました。

卒業後何回か高校を訪れたことはありましたが、改めて実習生として過ごすとなると、新校舎はどこかよそよそしい感じがしました。とは言っても、私は旧校舎一年にプレハブ校舎二年なので、旧校舎に愛着があったと言うより、近代的な新校舎に威圧感を覚えた、と言った方が正しいのかもしれない。

そんな思いを抱えながら、日々はあつという間に過ぎていきました。最初の一週間は無我夢中、自分のことで精一杯だったのですが、二週目に入ると多少余裕が出て、校舎をまわる機会が何度かありました。学校は青陵祭前で、生徒たちは慌ただしく作業をしたり、応援練習をしたりしていました。その様子を見て、私は自分の頃を思い出すと同時に、そのずっと前の先輩方の姿にも思いをはせました。そしてその時、やっと新校舎に親しみを覚えることができただけです。外見は変わっても、「ここ」に息づくものは変わっていないことに気付いたのでした。

そして青陵祭当日、私は審査員として参加したのですが、新グラウンド初の青陵祭の名に恥じない、いい青陵祭だったと思

います。珍しいほどの快晴の下、連合創造では何年かぶりに赤とんぼ賞が出て、華やかでした。その他、競技や応援にも一生懸命取り組む生徒たちを見て、感動すると同時に、自分の発見が間違っていないかと思ひました。最後に、私たちの教育実習のため心を砕いてくださった先生方、生徒の皆さんに感謝したいと思います。貴重な経験、そして有意義な二週間を過ごすことができました。どうもありがとうございました。

学校評議員制度発足

中野久 (71回)

昔、まだ私が坊主頭で白球を追っていた頃、グラウンド脇で毎日ゲキを飛ばす人がいた。野球部の練習が始まると、学校の近所に住むこの人は、腹巻・ステテコ・下駄履き姿でやってくる。そして、カワイイ野球部後輩である私達の一挙一動に大声を張り上げるのだ。気合いの入った練習は、この大先輩の存在に由る所が大きかった。(とにかくウルサイ近所のオヤジであった)。

最後に、私たちの教育実習の

は平成十四年四月。地域・社会の意見を踏まえて学校教育を推進することを旨とし、県立学校に評議員をおく制度である。開かれた学校づくりの推進、地域の声を聞く会の開催等、垣根のない交流をめざす活動内容が素晴らしい。

元来我ら青山同窓会は愛校心に満ちている。在校時代の愛校心は勿論であるが、「卒業生として」母校を語る時、その想いはますます熱くなる。私も卒業以来、熱烈なる「新潟高校サポーター」であるが、この「学校評議員」という名は何とも面はゆい。いやしかし、それと同時にカワイイ後輩達に今までの以上の関心を寄せる様になった心境の変化が自分自身でおもしろ

い。こうなると、身だしなみ・通学マナーから始まって精神論に至るまで、在校生に望む姿は限りが無い。「伝統ある自由な校風。だが自由闊達の意味をはき違えてるんじゃないか」「自覚をもち、自らを律する心が欠けてはいないか」「進学状況だけが尺度ではない。精神的なレベルの高さを持つて欲しい」：いやいや、ウルサイオヤジに変身してしまおうである。

いただいた様々な資料の中には生徒手帳もあり、懐かしい校歌や応援歌として「われわれ新潟高等学校生徒は、高い誇りを持つて学業に専念し……」と始まる生徒心得をみつめた。自律・文武両道と常に導かれた在学時代だった。今、立場転じ、昔自分が言われた言葉に自らの想いも乗せて口にする事は感慨深い。在校生達の日頃の活動の成果・活躍ぶりに一喜一憂、母校を見つめ直す機会を与えていただいたことに感謝したい。

愛校心というものは歳を追うごとに育ってくる。学校評議員としての役割を与えていただいたからには、「グラウンド脇でゲキを飛ばす」のにも似た気持ちで母校を応援していきたいものである。

59期古稀の祝いの集い

伊佐 修 (59回)

今年是我々59期大半の同期生が「古稀」を迎える年となった。早いもので遂この前還暦が過ぎたとばかり思っていたが、あれから一〇年人生節目の年である。

二月の上旬幹事五人が集り、慎重に計画を重ねて準備に入った。四月中旬縣内居住の同期生一三〇人に案内状を送りその当日がやって来た。五月二六日である。

此の日は朝から雲一つない五月晴れの晴天に恵まれ気温も二度と申し分ない日和となった。参加者は午前一〇時丁度、白山神社に集合。厳肅のうちに神主の祝詞奏上に続きお祓いを受けた。総勢一四名である。

神事の終わった後、白山様専属の寫眞屋から本殿の前に整列し記念寫眞を撮って貰い、一〇時四〇分駐車場に待たせておいたホテル大橋のマイクロバスに乗り込み新緑の角田山を右手に眺めながら懇親会場の岩室温泉へと向った。

四〇分後に会場に到着。美人で愛想の良い数名の従業員さん

の出向えを受け控室に通される。早速お茶のもてなしを受け、後お風呂へと向った。泡風呂に入る者、露天風呂につかる者、足を延しゆっくりお湯につかって汗を流し過ぎ去った七〇年の

垢を落した。風呂から上って部屋に戻ると大の囲碁愛好者が三人、温泉にも入らず碁に熱中している。そうこうしているうちに宴会の時間も近づき懇親会場へと移動した。いつもの様に会場中央の壁に青山同窓会59期同期会の旗を掲げて定刻となった。

宮田幹事の司会で校歌斉唱の後逝去された級友への黙祷を捧げ一通りのセレモニーは終る。

川上博君が肺がんの為、亡くなった話があった。彼は野球部に所属し、三番を打ちセカンドを守ってタイガーの愛称で皆んなの人気者であった。

これら59期の物故者は約40名となり、一抹の淋しさを感じるばかりである。また今回の古稀の集りで欠席者の多かつた理由として、たまたま此の日はお日柄がよく良くて別の行事に重なった人も多かつた事ともう一つは体調不調のため、出席出来なかつた人が多く居てこれら出席率の悪い大きな原因となった。特に四月の下旬に虚血性脳梗塞で倒れ桑名病院に約一ヶ月入院した人も居た。



青山同窓会59期同期会

最後に今夏の青山同窓会は七月二日に開催が決り一人でも多くの会員券購入依頼の檄が飛ばされた。

最後に今夏の青山同窓会は七月二日に開催が決り一人でも多くの会員券購入依頼の檄が飛ばされた。

最後に今夏の青山同窓会は七月二日に開催が決り一人でも多くの会員券購入依頼の檄が飛ばされた。

最後に今夏の青山同窓会は七月二日に開催が決り一人でも多くの会員券購入依頼の檄が飛ばされた。

最後に今夏の青山同窓会は七月二日に開催が決り一人でも多くの会員券購入依頼の檄が飛ばされた。

最後に今夏の青山同窓会は七月二日に開催が決り一人でも多くの会員券購入依頼の檄が飛ばされた。

最後に今夏の青山同窓会は七月二日に開催が決り一人でも多くの会員券購入依頼の檄が飛ばされた。

最後に今夏の青山同窓会は七月二日に開催が決り一人でも多くの会員券購入依頼の檄が飛ばされた。

最後に今夏の青山同窓会は七月二日に開催が決り一人でも多くの会員券購入依頼の檄が飛ばされた。

ボート部OB会総会
三月二十二日

ボート部OB会こと青山艇友会の定時総会は平成十四年三月二十三日(土)、新潟市内の四川飯店で開催。同窓会から上村会長のご出席を得、元顧問大橋先生、現顧問君先生、井之川先生、さらに大先輩の扇嘉家氏らOBを合わせまして一五名でした。むかし懐かしい顔が一堂に。しかし二十名を超える予定が変更更で減少、結果としてやや寂しい人数でした。

当日出席者

- 上村 光司 (同窓会長)
- 大橋 禎助 (元顧問)
- 君伸 一郎 (顧問)
- 井之川 豊 (顧問)
- 扇 嘉家 (45)
- 砂山 晃 (55)
- 佐藤 勝弘 (65)
- 小町 聰敏 (69)
- 富田 省一 (72)
- 渡辺 研二 (75)
- 水沼 真一 (78)
- 増井 隆夫 (79)
- 桜井 優 (80)
- 佐藤 正昭 (80)
- 南場 隆広 (89)

(報告者 渡辺研二)

フエンシング部 OB懇親会の報告

遠藤 聡一 (87回)

3月9日(土)新潟駅前において、フエンシング部OB懇親会を行い、お忙しい中、青山同窓会監事早福卓様、OB21名にご出席を頂きました。今年は何年より出席者が少な目でしたが、楽しく盛り上がった会になりました。



向けての選手強化の取り組み等

報告がされました。今後は、開催時期を工夫し、歴代顧問の先生、三百余名



のOBの交流を目的に、また現役への支援の意味も含めて、年

1回はOB懇親会を開催する予定でおります。

青山バドミントンクラブ

日野浦広昭 (77回)

去る5月17日(金)ホテル金寿海鮮亭羅言にて平成14年度の総会が開かれました。

最近落ち着かれたとの事で当クラブへの寄付10万円と共に鄭重なるお手紙を頂きました。」と報告がありました。

平成13年度の事業報告、決算報告、会費の改定案、平成14年度の事業計画案等が承認されました。

それについて、北村会長より礼状をお送りし、お花を手配して御霊前にお供えいただき、ご厚志の一部より須藤先輩からのシャトル代(羽代)として、後輩に贈呈する事としたとの案が承認され、ただちに実行されました。

平成14年度行事日程は次の通りです。

予定日	行事	会場
5月17日(金)	総会	海鮮亭羅言
5月26日(日)	春期ゴルフコンペ	笹神五頭G.C
7月末~8月初旬	現役合宿激励会(新規行事)	新潟高校体育館
8月24日(土)	納涼バーベキュー大会	信濃川やすらぎ堤
11月23日(祝)	秋期ゴルフコンペ(昼)	新津C.C
	家族同伴の集い(夜)	行形亭
2月7日(金)	新年会	未定

議事後、北村会長より「2期卒の須藤晃一先輩の奥様より、先輩が1昨年、住友金属鋁山(株)の会長在任中に亡くなられたとのこと、奥様もやっ

お開きの後、話し足りない飲み足りない方が多くて、古町へ二次会へと散って行きました。青山バドミントンクラブは色々な行事を企画して、現役を

応援しながら幅広い年代そして多くの会員の参加で我々OB自身も楽しむ会となっております。

グラウンド改修竣工に寄せて

青山野球倶楽部

小沢謙一 (93回)

新校舎の建設、及びグラウンドの改修が、足掛け7年を経て今春竣工されました。その間、野球部は小針球場や青陵高校との合同練習などに場を求めて練習を続けてきました。この度のグラウンド改修竣工にあたり、同窓会よりバッティングケージの寄贈をいただいたり、青山野球倶楽部も投球練習場の構築をした

離れて20年近くになります。記憶の中の風景とは様変わりしましたが、グラウンドに響く金属バットの快音や選手達の掛け声は、その頃と変わっておらず、自分がグラウンドを駆け回っていた頃が鮮やかに蘇ってきました。

3月24日には、新潟商業を招いてコケラ落しとの記念試合が行われました。当日は、肌寒い天候にもかかわらず、多数のOB諸兄が見えられ選手のプレーは勿論、変貌を遂げたグラウンドを見て、各自各年代のグラウンド

部活動を通じて得た、苦しく辛く、また楽しかった経験と多くの友人達が、現在の自分を支えてくれていると思っております。また青山野球倶楽部においては、世代が大きく違っていますが、同じグラウンドで汗を流し甲子園をめざしたという共通点で結ばれた諸先輩方と親しく交流させていただいていることは、私にとって大変に貴重な財産となっております。

お聞きの後、話し足りない飲み足りない方が多くて、古町へ二次会へと散って行きました。青山バドミントンクラブは色々な行事を企画して、現役を

現役諸君には、我々OBが実現することができなかった甲子園出場という悲願を託し、新しいグラウンドで悔いがない、思う存分の練習に励んでいただきたいと思います。

同窓生の新刊

事務局に贈られて来た、同窓の新刊を紹介します。

『尚古堂春秋』(作品社)

小黒昌一(62回) 著

田村 誠一(62回)

新潟市を舞台にした小説である。読書人」と評しておられる。

『尚古堂春秋』は、文芸誌「早稲田文学」に平成十一年七月から二年半に亘って長期連載され、本年四月、単行本として上梓された。

同期生初の(そして最後かも知れない)六十六歳の作家の誕生は喜びに堪えない。

小黒君は、早稲田大学文学部教授で、中世英語の権威であり、「中世英国写本国際会議」日本開催を主宰するなど、世界的な活躍をしている学者である。

一昨年、『新潟日報(夕刊)「晴雨計」に半年間、軽妙洒脱なエッセイを寄せた。愛読された方も多かったのではないか。

この「晴雨計」の文と他の新聞雑誌等に発表したエッセイを編集した『むべの基敵』(校倉書房)が、昨年出版され、「新潟日報」に「学識と人柄のにじみ出た好エッセイ集である」と紹介された。作家庄野潤三氏は「童心と大人の風格を併せ持つ、たのしい短文集である。」(週刊

小沼丹は、先年亡くなった。敬愛する先輩を惜しむ追悼文を「早稲田大学」に「白き花はたと落ちたり」と題して寄せている。「むべの基敵」所収)最後はこう結ばれる。

白い天馬の牽く白い馬車に乗って、小沼さんは今どの辺りを駆けているのだろうか。天国に十二あるという真珠の門のどの門に向かっているのだろうか。もしかすると、あの「埴輪の馬」をもらいうけに行つたときに、送迎の消防車に乗って村長さんと間違えられた清水町先生と一緒に、ゆつくりゆつくり、あちらを眺め、こちらを見やり、「ウチラデテミリアアテドモナイガ」(出門何所見「トコロガ会ヒタイヒトモナク」(可歎無知己)など口ずさみながら、案外と道草を食っておられるのかも知れない。見るべきものを見る確かでやさしい目がある。

古美術商「尚古堂」は、十一坪のたたきの土間に骨董品が足の踏み場もないほど積み上げられている。三畳の小上がりには炬燵、火鉢、本立て、筆立て、茶道具等々が「雑然の中に整頓されて置いてあり、辛うじて残つた半畳足らずの僅かな空き間、そこに店主が片膝を立てて納まっている。」店主今関悟堂

の背後には、横の長さ一間はあろうかという扁額「尚古堂」が高々と掲げられている。「今東光」と落款がある。

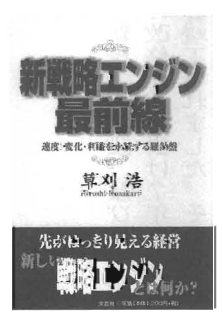
飛ぶツバメの姿もめつきり少なくなつた掘端の柳の木の下で、寂を含んだ低い語りの声がほとばしり出ていた。「或る夏の夕方、松林を抜けて砂丘を下り、砂鉄で光る浜辺の黒砂を踏んで水に入るお菊サを見掛けました。日本海の夕日を浴びて赤い腰巻き姿のまま「湯浴み」するその姿は美しくも鬼気迫るものがありました。」

この小説の特色は三十五句も川柳が織り込まれていること。悟堂の心境や政治批判などを表すのに効果的に用いられている。例えば源氏物語のような物語はあったが、近代に入つてからは韻文と散文が融合した小説

「交友の場」での話題は、書画骨董は勿論、「食」は満漢全席、おふくろの味、「酒」「病」「政治」「鳥打ち」「川柳」そして「人」には今東光、棟方志功、魯迅、周作人、新劇の女優、また今六十二歳以上の新潟育ちの人なら多分ご存知の太郎サ、お菊サなどで、それらが高雅に語り合われ、悟堂の「交友」は読者に羨望の念を抱かせる。

『新戦略エンジン最前線』(文芸社)

草刈 浩(71回) 著



◎定価(本体一、二〇〇円十税) プロフィール

パブル経済崩壊前後からの激動の数々を、企業・経営者とともに歩み、復元力・成長力を永続させる企業経営の真理に、企

業・経営者と共に迫り続ける。二千以上の企業・経営者のインサイドで、企業経営について金融を越えた豊かな会話を重ねて来た、中小企業金融公庫での三十年余に平成十二年度で終止を打つ。

現在、情報処理振興事業協会(TPA)に勤務。昭和20年生れ。山形大学卒。メールアドレス (h.kusaki@hmail.com)

ハイティーン水泳

新中・新高 35

平田大六 (60回)

61 課(水泳)外教育

水泳以外で大黒善弥(50回)監督に教えてもらったのは、マージャン、ドイツ語、多少の医学の知識の三つだった。

医学といっても、その頃、大黒善弥監督は医学生だったの度のものである。ここには骨が二本並んで入るとか、腹こわしてもプールの水を飲めばなおる、とかのたぐいでしかない。ドイツ語もそう。医学関連のムスケル(筋肉)や、メツチエン(少女、娘)のように単語ばかりのら列で文脈などはなく、しかもドイツ語はローマ字読みでは、通用するから教える側でも楽のはずだ。そこからみれば、中村均(58回)先輩のほ

ある。

ご自宅は、田中町で、中央高校水泳部の美人で名選手の藤木玲(倉島)さんの家は背中合せだったと思う。大黒監督の品の良いご母堂が和服で、でてこられ、「いつも善弥がお世話さまになりました」といいねいにあいさつされるのでとまどった。時には、後々大黒監督の奥さま

になられる礼子さんが、許婚(いいなづけ)風に入出されておられ、私たちに料理をつくってくれたりした。こんなやさしいご家庭で育てられた人なのに、なぜ、水泳で私たちをきつくシゴクのか、理不尽な思いがいつもつきまとう。

一方、ご尊父は、二階に居るわけではないのだが、「雲の上の人だった。後姿はお見かけしたが、お話ししたかという記憶は、私にはなにもない。

大黒監督のマージャンはプロなみだ。

会場は大黒善弥監督の自宅(60回の青柳)、江口良助(61回)、私と三人がその弟子で

大黒監督の自宅へマージャンを習いにゆく理由はほかにあったのだ。それは、パイが、花札などちがってどこか家庭に

も置いてあるという道具ではなかった。それは、当時、プラス

チック製は開発がおくれ、高価な象牙製がほとんどだったのだ。仲間が持つていけば、なにも大黒監督といっしょになつてやらなくてもすむのである。まもなく二学期が終る。高校二年生の冬休みがはじまる。この冬休みに……私は途方もないことを企てて、パイの模様の構造を頭にたたきこんだ。

サッカーW杯

雑感

近藤 圓 (38回)

サッカーワールドカップ(以下W杯)が始まって十日、原稿メ切りの都合で終了前ながら。私は全ての種目で覇を競うオリンピックが最高のスポーツ大会と思っているが、熱狂するファンがあり立てるせいW杯が今や世界最高最大の大会だとい

この「途方もない」ことを考えているかたわら、ふと来シーズンのことが頭をよぎる。私にとつてはいよいよ最後の選手生活となる。冬は泳げないのだけれど、冬期トレーニングだってやればできる。それなのに、こんなことでよいのだろうか。(つづく)

わが新潟なども一流選手を出しているわけでもないし、県内高校サッカーが全国入賞したこともないし、プロのアルビレックスもJ2程度なのにこのW杯に立候補し、幸か不幸か当選した。そして県下最大の愛好者や実施者を持ちながら、高校野球では選抜大会にも選ばれず、プロ野球の誘致もできない野球関係者が熱望する野球場造りを先

に延ばし三百億円余の大金を投じてサッカー場を造った。そしてふたをあけてみれば試合はたつた三つ、せめて日本チームでも出ればいいのだが、地図を見ても、どこにあるか分からないような国の試合だけだ。私もかつて東京オリンピックや体操世界選手権大会等多くの国際スポーツ大会に関係してきたが、その成否はお互いの信頼と友好の精神がその基調をなしているのだ。ところがW杯には信頼も友好ももうすく、極めて危険な大会である。その現実がク

にし、凶器になる農具は屋外に置くなという達示があったという。また開催地の警察は、楯や催涙ガスで武装してフリーガン対策に訓練を怠らない。これがW杯の実態なので、こんな危険で害悪をもたらすスポーツ大会は他に例がない。そして昨日の日本対ロシアの試合で幸い日本が勝ったが負けたりロシアでは、負けた悔やしからか大騒動が起り、車に火をつけ、ひっくり返し五〇余名の負傷者を出している。勝敗が逆であれば、日本のサポーターも暴れ回ったと想像できる。ところで今回の大会の珍しい不祥事は空席問題であろう。どこの会場でもチケットが買えず入場できない市民は何千人とおつた。ところが第一日目、トッブ開催の新潟で空席が八千六百もあつた。その後の調査で札幌一万、二日目埼玉一万一千、カシマ七千七百、三日目新潟一万、札幌一万一千五百と軒並み空席続き。こういう人を馬鹿にし踏みつけるやり方に対し、気骨ある埼玉や宮城の知事は怒って本部に抗議に出かけ訴訟に持ち込むと叫んだ。国際サッカー連盟(FIFA)のブラッター会長と英国の旅行社バイロムとの黒い交際が災いを作ったという説もあつた。韓国のホテルはバイロム

の何万室というキャンセルで苦しんでいるという。W杯関係者の猛省を促したい。もう一つ、新潟で起こった不愉快の事件だが、一歳未満の赤ん坊にも入場券が無いと入れられないと断ったという事件。赤ん坊をひざの上か背中におんぶしておれば誰にも迷惑をかけない。観劇や音楽会ならともかくあの騒々しい競技場の中で、なぜ赤ん坊からまで席料を取るのか。ルール一点張りの石頭の関係者の猛省をうながしたい。日本の若いサポーターについて面白いのは、日教組教師の教育を受け、国旗掲揚に反対してきたと思える若者が日の丸の鉢巻を締め、顔に日の丸を描いている姿、W杯となるとイデオロギーも消しとぶようである。また韓日共催なので、これで両国は親交が深まるように期待している向きが多いのだが、根深い日本嫌いの向こうは、日本人が思うほど簡単にはゆかぬと思

同窓会報にはふさわしくないかとも思うが社会的現実なので一筆いたしました。あしからず。

スポーツ振興功勞により
勲五等双光旭日章受章

東京青山総会余談 全校弥彦行軍

富所強哉 (46回)

一月に配布になった会報七四号掲載の東京青山同窓会総会の報告で、母校校舍改築・創立百十周年を記念してのトークショーで私の話した戦捷祈願の弥彦神社が誤って白山神社に、勤労奉仕の射撃場作り作業(註一)が野外清掃になっていた。また「登場人物はカーキ色」が制服の色を意味するのであれば、それはその年の一年生(五十回・上村会長の学年)からであった。

「幹事全員が先輩にと言っている」とのオダテに乗せられて引き受けたのだが、戦前についてはもつと年長の方であるべきだったことと、何よりも私達の五・六年後の人に終戦間近の近況を話して貰う必要があったのではないかと、今になって強く感じている。

に迷った記憶が生々しい。彼等には飛行場建設の土工作業が日常日課になっていたのである。ついでに話は変わるが、小生出身の北大に学んでいる後輩の話では、同窓会など青山出身者の連携がないという。第八回卒の伊藤誠哉農学部教授(後総長)を理事長とする新潟寮(私設寮人寮)を中心とした私の頃と、社会事情をはじめ学校の規模・学生数など事情が違うのは分かるが淋しいことである。

「アナスタシア号に
母校生を乗船させよう」
監事 上杉雅之 (60回)

他のことはともかく戦捷祈願(前年日華事変勃発)については、この報告を読んで事実との違いに強い不満を感じる人もあろうし、それが全校の教師生徒が弥彦までを歩く(帰りは鉄道だが)と言う大変なことだったことを思うと、単に訂正記事を載せて頂くだけでなく改めて全会員に紹介するのも意義があるうかとこの稿を投ずるものである。

尤もこの予科練、出身者には伝えられるように太平洋戦争末期の特攻で亡くなった方が多いのは事実であるが、この頃に志願した人達は戦死どころか、まともな飛行訓練も受けられなかった人が多いのではないかと思

サッカーワールドカップ(W杯)開催中、「水都フェスタ」と銘うった信濃川河畔でのイベントが、国内外のサポーター達や観光客のために催された。殆どどのプレジャーボート(釣り船や遊覧船)が両岸に係留されたままで出番のない中、アナスタシア号だけが川からの水都案内に精を出している姿が印象的であった。アナスタシア号は82回生栗原道平君が社長をつとめる「信濃川ウォーターシャトル株式会社」の所有する旅客船であり、新潟市民にはすでになじみ深い存在である。

そのアナスタシア号に乗船し新潟市を川から見た時の感動は忘れられない。六つのアーチを持つ瀟洒な万代橋を下から見上げた。川にどっしりと構える橋脚の堅牢さ、たくましさ。この橋脚こそが約四十年前の地震に耐え万代橋の美しさを支えてきているのだ。川面をすべるように航行してゆくアナスタシア号の窓に映る新潟市は、川沿いに立ち並ぶ数々の建造物が空を覆うように迫り圧倒してくる。サッカー場のピッチ(芝生)から見上げる「ビッグスワン」はこもあろうかと思わせるほど、新潟市が新鮮でしかもたくましく見えたのである。日常的な目線から離れ、異なった別線で見物を見ることで新しい発見があるのだと感じた。

昭和十五年の時局に添わないこととで退任を強いられたと伝えられる、あの自由を愛した梅田三郎校長がよくそのような決断をされたものと、このトークを終えて改めて思ったことである。

そこでもこのオシヤベリ、時間が限られたこともあって極力感情を交えず事実の要点だけを話すように心掛けたつもりだが、この齢になって(この齢になったからこそか)画面中心のただの数分間に、聞く人の神経を集中させることが出来ず誤って報せられる結果を招いた

ここで提案だが、わが青山同窓会がチャーターし、在校生をアナスタシア号に優待乗船させたいものである。費用は今の負担で割りきにする。目線を変え、物の見方を変えることで彼らは大きな視野が開けることを身をもって体験し、新潟市の良さを再発見し愛着を持つのではないだろうか。政令指定都市「水の都新潟」に大きく脱皮するため、彼らは力強いエネルギー源となつてくれることを確信している。

青山百年史の年表(註二)にも載っているこの行事は私が五年生だった昭和十三年秋のこと

で、当時横越村の叔母の家に寄寓し荻川から汽車通学していた私は、母校への集合が早朝で一

で、当時横越村の叔母の家に寄寓し荻川から汽車通学していた私は、母校への集合が早朝で一

で、当時横越村の叔母の家に寄寓し荻川から汽車通学していた私は、母校への集合が早朝で一

で、当時横越村の叔母の家に寄寓し荻川から汽車通学していた私は、母校への集合が早朝で一

で、当時横越村の叔母の家に寄寓し荻川から汽車通学していた私は、母校への集合が早朝で一

追悼

「貝われ二つ！」

渡邊 眞 (62回卒僧侶)

眼科医佐野良作君命終。平成
 一二年三月十七日脳硬塞を発
 症、平成十四年五月二十一日、
 われ」を見つ、あの愛すべき
 同期の西野勲君が院長の、東新
 潟病院で六十七年の生涯を閉じ
 た。病臥二年、その間瞬時とて
 意識が戻ることはなかった。
 五月二十二日通夜。早めに斎
 場に参じ、永劫の眠
 りにある彼の棺前に、
 通夜勤行直前まで立
 った。初めて逢った
 高校の頃から、変わ
 ることのない童心稚
 気の友であった。
 同期会で上京の折



からむように交わった高校時
 代を共有したので
 ある。沸々と思
 いは湧く。あの事
 この事。棺前の私
 は法衣のまま、や
 がて激しい嗚咽に
 襲われたのであつ
 た。今も悲しい。

母校は今

まず私ことですが、校内幹事
 の山田は今年度で定年退職で
 す。十二日の総会で承認しても
 らう段取りですが、木村正史
 (77回・化学)、玉木正巳(86
 回・数学)の二人が後任になり
 ます。

昨年度、学校の大変革は息
 ついた、とこの欄に書いた記憶

があるのですが、今年度も、こ
 の会報に中野久さんの記事があ
 りますが、開
 かれた学校づ
 くりというこ
 とで「学校評
 議員制度」が
 できたり、「地
 域住民との話
 し合い」が設
 けられたり、
 まだまだ激動
 が続いています



二月に、東京青山同
 窓会の斉藤伸雄名誉
 会長、栗林貞一会長
 らとともに、本校の
 改築校舎の完成を祝
 つてご来校くださっ
 たときの、正面玄関
 での一言が忘れられ
 ません。
 「やあ、これが俺
 の母校か」



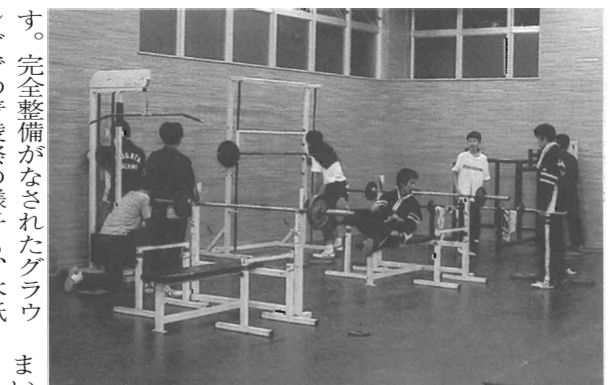
この秋に向けて応援歌
 の、新旧の変化などの、
 調査・整備を行います。
 上村会長の肝いり
 で、校内幹事の木村が
 関根彰園先生などから
 お知恵を拝借しながら
 まとめる予定です。秋
 には何らかの形になる
 はずです。



す。老兵
 は消え去
 るのみ、
 などと気
 障に(?)
 うそぶい
 ている場
 合ではな
 いのでし
 ようが、
 本来事務
 連絡係の
 つもりで
 引き受け
 た校内幹
 事役を終
 えるにあたり、あまり全うでき
 たという自覚がありませんの
 で、隠れるように引つ込みたい
 と思っています。



昔と違うな、立派に
 なったな、立派過ぎ
 るな、大変だったか
 ね、苦労したね、お
 めでとう。あらゆる
 心遣いが全部込めら
 れ、しかもたった一
 言で自分の真情も吐
 露された、名言でし
 た。どんな立派な花
 束やご祝儀よりあり
 がたく、晴れがまし
 い気持ちにならせて
 もらうことが出来た
 でした。



発行の74号で、平成十三
 年度東京青山同窓会総会報
 告、「創立百周年記念総
 会」―懐かしの映像ととも
 に思い出を語る―の最初の
 パネリスト、富所強哉氏が
 「白山神社に戦勝祈願」は
 「弥彦神社に」の間違い
 です。それだけを訂正して
 消えようと思います。あと、
 同号の「青山69回四周年
 記念同窓会」を書いてくれ
 た同期の大森ゆかりさん
 (当然69回なのに) 64回と
 して五才も年を取らせてし
 まいました。これはご本人に
 一番申し訳ありません。あ
 と・・・終ります。

後輩の進路

今春、全日制を卒業し、青山同窓会に入会した新入会員は三九一名で昨年の三九八名より少ない人数となりました。その進路先は大学進学者が二五八名(昨年と同数)、浪人等が一三三名でありました。その結果、進学者率が六六・〇%となり、昨年の六四・八%を若干上回りました。さて、今春の入試結果の特徴を現役を中心に述べてみます。

国公立大	合格者数	私立大学	合格者数
新 潟	105 (86)	早 稲 田	36 (15)
北 海 道	19 (13)	慶 應 応	26 (13)
東 北	23 (15)	中 央 治	39 (17)
東 京	13 (8)	明 治 教	38 (17)
一 橋	11 (7)	立 法 政	20 (12)
東京工業	3 (2)	法 本	25 (12)
名古屋	2 (1)	日 本	23 (13)
京 都	6 (3)	上 智	7 (3)
大 阪	2 (1)	青山学院	16 (9)
九 州	1 (0)	東京理科	40 (14)
旭川医科	2 (2)	文 教	3 (1)
山 形	2 (1)	大妻女子	3 (2)
筑 波	14 (12)	北 里	14 (11)
埼 玉	2 (1)	共立女子	3 (3)
千 葉	16 (8)	共立薬科	1 (1)
東京医歯	1 (0)	国際基督	5 (5)
東京外語	2 (2)	専 修	10 (4)
東京学芸	3 (3)	津 田 塾	11 (7)
お茶の水	5 (3)	東京女子	6 (6)
横浜国立	8 (6)	東京農業	4 (3)
上越教育	1 (1)	東京薬科	4 (2)
富山医薬	3 (1)	日本女子	3 (3)
金 沢	8 (4)	星 薬 科	4 (2)
信 州	4 (3)	明治学院	5 (2)
静 岡	1 (0)	明治薬科	3 (2)
浜松医科	1 (0)	新潟薬科	8 (3)
名古屋工	2 (0)	同 志 社	3 (2)
神 戸	4 (4)	立 命 館	16 (10)
奈良女子	1 (1)	そ の 他	178 (11)
高知医科	1 (0)	合 計	554(205)
佐賀医科	1 (1)		
琉 球	1 (0)		
札幌医科	1 (0)		
東京都立	3 (1)		
横浜市立	5 (3)		
新潟県立	2 (0)		
静岡県立	2 (0)		
そ の 他	12 (2)		
合 計	294(196)		

※ () 内の数字は現役の数

①東京大学・一橋大学の合格者が増加しましたが、京都大学・東京工業大学の合格者は減少しました。

②合格率が70%を超えました。

③新潟大学の合格率が50%を超えました。

④医学科(新潟大学を含む)の合格者が減少しました。

①について・東京大学の合格者数は現役8名・浪人5名の計13名でありました。今年も成績上位者が東京大を受験したのが増加した第一の理由であると思います。ただ、文系の合格者がいせんでしたので、この点が課題であると思われます。また、昨年比でいいますと、一橋大は+3、京大が-1、東京工

大が-4でありました。

②について・昨年はぎりぎり70%を割りりましたが、今年も七二・一%となりました。とくに、文系の女子の頑張りが目立ちました。

③について・昨年は医学科を除けば、50%を超えていたのですが、今年も全体でも、五五・一%となりました。特に、人文学部などの文系の学部での合格率の良さが目立ちました。

④について・例年10名は必ず超えていましたが、今年も①で述べましたように成績上位者が東大に流れたこともあり、全体で8名という結果となりました。新潟大に限りますと、4名(昨年8名)でありました。

今年も私立大学の合格率は昨年と比べると5%程下がりました。最近国公立大学に人気が集まっている状況ですが、首都圏の難関私立は志願者を多く集めています。すべり止めという気持ちでなく、第一志望であるという気持ちで臨んでほしいと思います。

今後とも後輩の進路実現のため同窓の皆様のご理解をいただきますとともにご協力をお願い申し上げます。

私立大学

今年も私立大学の合格率は昨年と比べると5%程下がりました。最近国公立大学に人気が集まっている状況ですが、首都圏の難関私立は志願者を多く集めています。すべり止めという気持ちでなく、第一志望であるという気持ちで臨んでほしいと思います。

今後とも後輩の進路実現のため同窓の皆様のご理解をいただきますとともにご協力をお願い申し上げます。

今後とも後輩の進路実現のため同窓の皆様のご理解をいただきますとともにご協力をお願い申し上げます。

今後とも後輩の進路実現のため同窓の皆様のご理解をいただきますとともにご協力をお願い申し上げます。

今後とも後輩の進路実現のため同窓の皆様のご理解をいただきますとともにご協力をお願い申し上げます。

今後とも後輩の進路実現のため同窓の皆様のご理解をいただきますとともにご協力をお願い申し上げます。

職員の異動

(平成十四年四月)

(進路指導部長 伊藤 晶)

全日制 (退職 転出 転入先)

教頭 和田 文夫 柏崎常盤高

教諭 水上 博雄 巻高

〃 杉本 耕一 退職

〃 中村 健郎 川西高教頭

〃 猪又 齊 小出高教頭

〃 杵淵謙二郎 退職

〃 瀬野 正英 青少年セン

〃 〃 ター研修課長

〃 〃 野沢健一郎 湯沢高

〃 〃 養護教諭 伊藤八千代 新発田高

〃 〃 〃

〃 〃 〃

〃 〃 〃

〃 〃 〃

〃 〃 〃

〃 〃 〃

〃 〃 〃

〃 〃 〃

教諭 栗原 恵子 新発田農高

〃 荒木 隆行 新発田南高

〃 春川 耕平 新津高

〃 鈴木 美幸 五泉高

〃 片桐 靖孝 退職

〃 細野 成夫 加茂高

〃 生野 貴子 長岡大手高

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

アクセス番号を知らせてください

数年来、同窓会のホームページの話が出たり消えたりしていますが、現在のところ独自で具体化する予定はありません。学校のホームページがあり、そこに同窓会の窓もあります。現在空き家です。同窓会の各期や部活のOB会でホームページを持っておられるところに、その窓にリンクしてもらおうということになりました。ホームページをお持ちの各期や各部はごぞつてご参加くださるようお願いいたします。とりあえずアクセス番号を同窓会事務局にお知らせください。

ばらばらでかまいませんが、一応8月一杯を受付期間として、秋からリンク、実用化(?)したいと考えております。その他、ご意見もお寄せください。

校舎竣工・創立百十周年記念行事（講演）

希望と改革

講師 佐藤 幸治先生（64回）

関西青山同窓会会長
元京都大学教授
近畿大学法学部教授



只今、過分のご紹介を頂きました。母校の記念すべき日に、お話が出来ることを大変光栄に思っております。ここに至るにつきは、宮沢校長先生はじめ職員の皆様、上村会長はじめ関係者の皆様のおかげで、心からの敬意を表したいと存じます。それでは早速本題に入ります。

最初に、この言葉を紹介したいと思います。「あらゆる力の源泉、それは希望である」という言葉です。この言葉は岡清君といまして、私と京都大学を昭和36年に同時に卒業し、住友銀行に一緒に入社しました。私は初めから学者になった訳ではなくて、1年2ヵ月程住友銀行におりました。先程の河合先生のお話ですが、大学に入る時

も文学史を読みすぎて1年浪人しましたし、ストリートに学者になった訳ではありません。いろいろ迷った末に銀行に行きましたが、1年2ヵ月で母校に戻ることになり、助手として私は

も文学史を読みすぎて1年浪人しましたし、ストリートに学者になった訳ではありません。いろいろ迷った末に銀行に行きましたが、1年2ヵ月で母校に戻ることになり、助手として私は

も文学史を読みすぎて1年浪人しましたし、ストリートに学者になった訳ではありません。いろいろ迷った末に銀行に行きましたが、1年2ヵ月で母校に戻ることになり、助手として私は

革審議会が非常に厳しい審議状況が続いているさなかでありまして、私自身その文を読んで、深い勇氣と力を与えてもらったように思いました。そこで少し文章は長いのですが、その一文を紹介させて頂きます。今回この話をするというので、岡君に「是非紹介したいのだが、よろしいか」と聞きましたら「君がいいのなら結構ですよ」と同意を得ましたので紹介させていただきます。

「息子は難産のうえ、障害児として産まれた。妻は箱入り娘だったが、母として力強く生きだ。ようやく入園を許された幼稚園には、しばしば暴れる息子を背負って通園した。夏の日差しにたしなみの化粧は、汗と涙と共に幾たび流れ落ちたことであろう。園から抜け出して近所の家に飛び込んでいたずらをした息子を連れ戻すため、先生と間違われて「こんな子の親の顔が見たい」となじられたこともあった。夜のじまの中で苦しみに悲しみが家中に満ちた。夫婦は、明日1分でも、いや来月1分でも、いや来年1分でも楽しいことがあるのではないかと、きつとある。そう信じて生きて行こう。誓い合って涙を滲ませて床に入ったことも幾夜かあった。妻は入院中の病院から自宅へ電話をしてきた。私は息子を電話口に出させ、妻は息子の名前を声高に『アキラ！アキラ！』と連呼した。その時、

今迄どうしても会話が出来ず、息子が言えなかった、そして妻の最も望んでいたであろう息子からの言葉が私の耳を鋭く打った。『ママ、ママ』。妻はついに母の愛に対する報酬の宝物を耳にして、その後、旬日を経ずして眠るが如く他界した。それは世の親子が1日中楽し過ごした快晴の9年前の体育の日の事だった。妻の死を息子はどう思ったのであろう。葬式の日、ひとしきり大きな声を出したこと

はあったが、母の死の寂しさを言葉にも態度にも表せる力のない知恵の遅れた子だった。葬式から暫くして、わが家は千里丘から吹田へ移った。それからすぐに息子が家を飛び出して行方が分からなくなり、警察の世話になる騒動となった。ところが最終的に見つかったのが、千里丘の母と暮らした前家の家の中だった。幸か不幸か、千里丘の家は前のままの空き家だった。私は神の存在、母の天国からの愛、息子の母を慕う心、いずれも信じている。息子は一度も帰ったことのない道を、ましてや知恵に恵まれない子にとっては迷路のような遠い道を裸足で母を求めて走ったのである。靴下は底が抜けていた。私は息子を力いっぱい抱いた。私の好きな言葉は「希望」である。」

こうい文章であります。何もコメントは加えません。それで日本の現状について少しお話をしたいと思えます。日本は現在、国際的にも国内的にも極めて厳しい状況にあります。敗戦の廢墟から立ち上がろうとして、我々は懸命に努力をして、やがては高度経済成長の波に乗り、遂には「ジャパン アズナンバーワン」と言われるような経済大国に上り詰めました。しかし、その途端に日本は国際社会の趨勢から取り残されて、深刻な難局に直面していると言えらると思えます。膨大な財政赤字・景気の停滞・デフレの進行といった状況にあります。財政赤字は、国と地方を合わせて六六〇兆円という膨大な金額になっています。二〇〇一年度の予算で見ますと、国の収入、これは税収と税外収を合わせて五五兆円。この五五兆円のうち地方交付税として地方へ一七兆円が渡されます。従って国が使えるのは三八兆円に過ぎません。他方、支出は五九兆円です。赤字は二兆円、その分が借金ということになります。このような借金が毎年積み重なり国の借金表面に出ているだけでも五〇〇兆円に上っているわけですから、それに地方自治体が赤字を抱えています、それを加えると国・地方で約六六〇兆円という訳であります。我々の家計や企業から見れば想像を絶するような財政状況であります。家計や企業ならとくに破産です。国の場合は破産はない。しかし、このような状態が異常であるということは素人でもわかること

です。経済学や財政学ではいろんな議論があるでしょう。しかし、これは尋常ならざる事態だということには誰でも分かることだと思えます。問題が深刻なのは、この赤字が毎年増えている。この状況を止める。健全化に向けて決然として歩み出す、確たる道をまだ見出していないという事が、現在の我々が直面している最も深刻な問題と思えます。このような事が言われる時があります。「今の日本はあの豪華客船『タイタニック号』に似ている」と。人は良いものを着て、良いものを食べて、深刻な事態を感しない。そういうことが出来るのは、経済大国といわれるほどの富を我々が蓄積したおかげであります。しかし、先程お話をしたような状況にあるわけで、このような状況がいづまでも続くわけではない。我々は一等客船や甲板で依然としてシャンパン等で興じているかも知れないけれど、船倉船底では浸水が進んでいるという例えも当たっていないことはない、という感もするわけです。日本の国家・国民が国際社会の趨勢から取り残されてしまったということを痛感させる事柄は他にも多々ありますが、今回のアメリカの同時多発テロ事件に対する日本の国家・国民の反応を見て、あらためて趨勢からズレているなという思いがするわけですね。日本の国家・国民は21世紀をどのような価値観で、

どのようにして生きようとして
いるのかという問題でありま
す。

それにつけても思い出される
のは、日本国憲法を作る時に明
治憲法の改正という形で行われ
たことはご承知の通りですが、
この時の貴族院で南原繁先生と
佐々木惣一先生が次のような指
摘を執拗しておられるわけで
す。南原先生というのは、東京
大学の政治思想・政治哲学の先
生でありまして、東大の総長も
やられました。佐々木先生とい
うのは、私の先生の先生に当た
りまして、日本の近代史で学問
の自由、大学の自治をめぐって
最も過熱な闘いの中心人物であ
った人で、憲法学の大家であり
ます。この2人が貴族院での審
議で、このように言っておられ
るわけです。「憲法の第9条の
ままでは、日本は国際的な義務
を果たすことが出来るのか。第
9条はそれだけでは充分ではな
く、世界の平和を維持するには、
国際社会を構成する各国の協力
が必要で、日本もそれに積極的
に関わって行く必要があるが、
政府はいつたいてい考えている
のか」ということを執拗に質問
しておられる訳です。その時の
政府は「そういう問題は、全て
今後の研究課題である」という
答えで逃げております。日本は
占領下にありますが大事だから、
とにたく独立することが大事だ
と思いますが、将来の研究課題
と

だけ真剣に検討してきたでし
うか。そういう思いがする訳で
あります。

一体このような状況を生み出
したのは何だったのか? どう
してこのようになったのか?
という事を少し推理して申し上げ
たいと思います。

私の3年程先輩で60歳で亡く
なられた高坂正亮さん、テレビ
にもよく出られたのでご存じの
方もいらつしやると思います。
この高坂さんが1915年の「通商
国家、日本の運命」という論文
の中で次のような事を言ってお
られました。「通商国家の成功
によって人々は成功に酔いし
れ、自惚れると同時に狡猾さに
自己嫌悪を感じる傾向がある。
日本の経済的成功が偶然の幸運
によるものであったことを忘れ
てはならない」そして、次のよ
うにも言われたものでありま
す。当時は日本は景気が停滞し
ており、これからの日本をどう
するかという狭間の時、一九七
五年ですね、「ここ暫くは日本
は経済成長の再開と継続は可能
であっても、それとの決別を明
らかにし、これまでの努力の疲
労を回復し、活力を保ち、育て
ることに重きを置くべきであろ
う。それは多分、より苦しいこ
とであろうが、しかし苦しむと
いう事は惰性よりは生産的であ
る」という事を言っておられま
す。しかし、高坂さんのこの主
張は世に入れられませんでし
た。むしろその後パブルが進行

する中で、自惚れは、ますます
増長したと言ってもいいと思
います。そしてパブルの崩壊、挫
折であります。ある意味では、
喪失感・無力感に我々はとらわ
れている所があるような気がす
る訳であります。ゼミ生とよく
議論をするのですが、「先生は
改革とよく言うけれど、日本は
何をやってもどつちみち変わら
ないですよ」と言う冷めたゼミ
生がいます。いろんな議論をす
る訳ですけども、そういう若
い諸君がいるわけでありませ
ん。それでは、今申し上げた高坂さ
んが言う「惰性」とは一体何な
のか。それは一言で言えば
「我々が生きる上で大事な事を、
あまりにも他人任せにし過ぎ
た」という事ではないかと思っ
ております。もう少し具体的に
言いますと、我々は安易に政治
に依存しはしない。そしてまた、
その帳尻は政治ではなくて役
所、つまり官僚がその帳尻を合
わせてくれるだろうと思つて、
つまり肝心な事は役所、官僚ま
かせにしてきたところが無かつ
たか。確かに敗戦の廃墟の中で
国民は必死に頑張りましたし、
官僚は天下国家の為に必死の思
いで頑張つて来たと思ひます。

だからあの廃墟から立ち上がれ
たのだと思ひます。しかしなが
ら、高度経済成長が軌道に乗り
始めますと、役所の官僚の自
運動が始まってきます。つまり
官僚は自己組織の発展と保全を
念頭に行動するようになって行
きます。これは実は戦前の軍部
がそのような典型であります。
やがて自転運動を始めるわけ
です。企業等も役所・官僚の行動
様式に合わせて行動するよう
なつて行くのです。変革国家を
考え、或いは真剣に商売を考え
るといふ人達は次第に組織から
遠ざけられて、組織内の利害調
整を無難にこなす人たちが重用
されるようになってきます。ゼ
ミの学生と議論したり、コンパ
で一緒に飲んで議論したりとい
うこともよくやりますが、その
中で外交官になりたいという諸
君が「先生、大事なものはバ
ランスですね」と言うんですね。私
はその時思わず「アホか! 若
いうちからバランスなどと言
っているヤツはろくなものにな
らない。今の若い時にこそ、い
ろんな考え方に触れて、自分の
考え方を持とうとする事だ。バ
ランス感覚などは後でついてく
るものだ」と言つてワアワアと
騒いだことがあります。だん
だん調整型、組織内の利害調整
に長じた人達が主役になる状態
になって来たように思える訳で
あります。こうしたことが可能
であった背景には高坂さんが言
う「偶然的幸運」というものが
あります。要するに戦後の冷戦
構造と自由貿易体制の下で、日
本は安全保障とか外交上の厄介
な問題は基本的に全てアメリカ
に任せている。日本は経済的繁
栄のみを追求し得るといふ幸運
でありました。アメリカはソ連

に代表される共産主義体制に対
抗するために、日本が経済成長
に専念する、日本の経済力が強
くなるという事を無条件に許容
してくれました。しかし、高度
経済成長は無限に続くものでは
ありません。冷戦構造はベルリ
ンの壁が崩壊すると同時に終わ
りました。パブルが増長してい
た日本は、このことに気付くこ
とに遅れを取つた訳でありま
す。「人間は成功の絶頂にある
時が一番怖い」と言われますが、
国家社会の場合も全く同様だと
私は思います。成功が大きけれ
ば大きいほど自己の置かれた状
況を冷静に見つめて、それから
の転換を図るといふ事が非常に
難しい。大きな状況としてはそ
のようになります。

ここから少し細かい話になり
ますけれども、役所・官僚は決
して一枚岩ではありません。ど
の国も大かれ少なかれそうです
が、我国も大蔵省とか経済通産
省とか建設省、今は皆名前が変
わりましたが、各省がそれぞれ
の権限、縄張りの維持拡大を求
めて張り合う事、これを「各省
割拠主義」と呼んでおります。

その結果、縦割り行政とかい
いろと出て来るわけです。この
「各省割拠主義」というものに
日本は特に悩まされて来たと言
つていいと思います。日本が高
度経済成長に専念していた時は
これでも良かった。人によつて
はそれがプラスになったと言
人もおりますが、冷戦構造が終

わつてグローバル化が進展す
る。そして、わが国の高度経済
成長がもはや期待出来ない、終
わつたという事になりますと
「各省割拠主義」というやり方
でやつて行くことは非常に難
しい。殆ど不可能と言つていい
ような状況にあると言つていい
と思います。冷戦構造の終焉と
グローバル化の進展と言いま
したが、それは何を意味するの
かという事です。従来、国家主権
というのは高い垣根があった。
けれどもグローバル化というの
は、その垣根が低くなったとい
う事なんです。そして、地球の
風が吹きさらす訳です、それが
グローバル化になつてくるん
ですね。グローバル化と共に役割
が小さくなって行くという主張
もありません。私はずしもそ
うは思いません。そう言える面
もありませぬ。むしろ垣根が低
くもそのような簡単な話ではあ
りませぬ。むしろ垣根が低くな
つて、地球の風が吹きさらす
という事は、それに対して国家と
いう力が対応されるかどうか、
統治能力の質が試される訳で
す。この統治能力というのは、
国家としての総合戦略、日本と
しての国益を追求する、国民の
幸せにつながるような総合戦
略、或いは総合調整、或いは軌
道性、難しい問題に機敏に対応
できる、そういうことを含めて言
つています。そういう「統治能
力」の質が厳しく問わ
れるようになって来ている。グ

ローバル化というのはそれを意味しているのです。それから、高度経済成長の終わりは何を意味するのかと言いますと、我々は厳しい政策選択、それを優先させるかという価値選択。これを厳しくやって行かなければならないという事を意味しております。今まで今年是我慢せよ、来年は金が増えるんだから回してやる、ということをやつて来た訳ですが、今は財政難ですから何が日本にとって大事かという事を決めなくてはならない。政策選択をしなければならぬ訳です。しかし、この官僚支配、各省割拠主義という体質は、日本の明治憲法時代まで遡るわが国の牢固たる体質であります。これを打破するのは並大抵の事ではありません。それは後で少し申し上げます。

1960年代は「失われた10年」と言われますが、この間日本は様々な改革を試みてきた訳です。政治改革・行政改革・地方分権推進・規制緩和等の経済構造改革・情報公開法の制定等々さまざまな事をやって来ております。これはある外国人が日本で日本人自身が「失われた10年」と言うけれども、外から見ると「凄まじい10年」と言う人もいます。実際、今言つたようにいろんな改革をしております。それは何のために、何を指して改革をしようとしているのか、という話であります。一口で言えば「個人がもつと元

気を出せるような、より自由で公正な社会を築こう」と言うことに尽きると私は思っています。明治憲法時代の日本は、一刻も早く欧米先進国に追いつこうと、いわゆる「富国強兵策」を追求しました。その結果、河合先生が触れられた「お国のために」という考え方が強くなつた訳です。これに対して日本国憲法、一三条の規定ですが「全て国民は個人として尊重される。生命自由および幸福追求に對する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り立法その他の国政の上で最大の尊重を必要とする」。要するにこの規定は、自分で立つ、自分で律する「自立(自律)的」な個人を基礎とする社会、国家のあり方を描き出そう、それを目指さうとしたものと言つていいと思います。確かに戦後、法制度の仕組みや、国民の意識のあり方に相当大きく変わった所があるように思います。けれども、冷戦構造という国際環境の下で、国家の主権という高い垣根で守られる中で高度経済成長をひたすら追求するうちに、知らず知らず我々は戦前の総動員体制というような雰囲気を作り上げてしまつたように思える訳です。行政主導による事前規制・事前調整によつて企業等の序列、秩序が作られました。新規加入して来るという事を疎外す、そして序列、秩序のもとに個人が糾合されて行くという構

図であります。企業、個人は自立性や獨創性というよりは、体制への順応性が高く評価される。或いは評価されていると思ふようになる。先程のゼミ生の「バランスが大切ですね」という言葉に象徴されるように、日本で生きて行くためには、そういう生き方が賢明だと思ふ傾向が強いということがあります。マリナーズの佐々木投手がテレビで「日本ではまずチームワーク、チームプレーがあつて、そして個々の選手がいる。アメリカでは、まず個々の選手がいて、その上でチームワークがあり、チームプレーがある。そこが違ふ」という事を言つておりました。何でもアメリカが良いという訳ではありませんが、佐々木投手だけでなく野茂やイチロー、新庄等が非常にのびのびと明るくやっている姿が印象的であります。最近ノーベル賞を受賞された野依教授が「日本の国民はもつと奇人・変人を大事にするべきだ」と述べておられるのもシンボリックな言い方でありますけれども、日本の社会の現状の一面を突いておられると思ひます。政府・行政がいわば教育ママのように、国民の生活に保護・干渉を行う、そして国民も教育ママを頼り、依存するということから脱却して国民がもう少し自由に個性を發揮できる、その結果について責任を引き受ける、そうした自立と自己責任の社会を築く必要がある

のではないかと。政府も行政も教育ママの役割から脱却して、ローバル化の進展する国際社会にあつて厳しい諸課題に果敢に取り組めるようにする。これが単純に申しますと、改革の志と申したのではないかと思ふのです。それでは具体的には、どういふ形の日本を目指すのかという事になりますと、結論から言えばさる論者がこういう事を書いておられます。

「明治維新から百年以上も続いて来た、お上としての政府・統治者から、国民の為(クライアント)のサーバーとしての政府への役割転換を図ろうとするものだ」というように著しております。まず、今年の4月から情報公開法という法律が施行されました。これは明治憲法体制以来続いてきた官庁による情報独占、やや極端に言えば「よらしむべし、知らしむべからず」という体制からの転換を図ろうという事を意味しております。自治体では情報公開条例としてかなり前から制定され運用されており、それなりの実績はありますが、国の段階で、漸くこの情報公開法がこの4月から施行されたということがあります。それが意味することは、国民がこれをどのように利用するかで、利用の仕方によっては相当大きな意味を持つている法律であります。

て強調しておきたいのは、内閣総理大臣の指導性の強化と中央省庁の再編成であります。今年の1月6日から従来の省庁よりも半分減らし1府12省庁と言つておりますが、そのように中央省庁を再編成するという事です。この再編成については余り意味がないと。ちよつと羊羹を大きく切るのか、小さく切るのか、羊羹の切り分けみただけと言つたように省庁の再編を酷評されたことがあります。これも考えますと、国民や日本が、自らの力で本格的に省庁の再編に手を付けたのはこれが初めてなんです。本来省庁というのは何省をどう作つて、どういふ仕事をさせるかというのは、国民の利益になるのかどうかを考えればいい訳です。そうではなくて既存の省庁というのは、落とすことの出来ないお城みたいなものだという感覚。かつては、ある省の1つの課を潰すのに大騒ぎだったそうです。それを今回このような形で省庁を再編した、このこと自体が持つ意味は非常に大きいものがあると思ひております。

では、なぜ日本は各省の力がだけ説明しておきます。これは日本の現象を見る時に、歴史的背景から見ないと本当の部分が分からなところがあります。明治憲法体制では行政権は誰が行使するのかと言いますと、それは天皇です。その天皇を助け

る者として行政各部、各省が作られたのです。そのトップは国務大臣です。内閣という制度は明治憲法下にはありません。内閣制度、内閣総理大臣というのは勿論ありますが、それは内閣官制という勅令で作つた。行政権者は天皇ですから、自分がやる場合の仕組みは自分で作つた。これですと天皇が日本の政治を仕切つて行くという前提であります。それを各省のトップである国務大臣がそれぞれの立場で助ける、そういう構造でありました。ところが、天皇自らが政治を仕切ると良い時は良いのですが、悪くなると天皇が傷付きます。天皇の責任問題になります。そのようなことから天皇はだんだん名目化、立憲君主になつていくべきだ。少しずつ雲の上の存在になつて行くべきという主張が出て来ましたが、実際そのような動きになつて来ました。天皇が自分で大事な事を決断しないと、それは誰がするのか。国家として最終的に重い決断をしなければならぬが、誰がするのか。あるのは各省、各閣務大臣がいるだけです。内閣はありますが、それは各省のトップである国務大臣が集まつているだけのものです。総理大臣も他の国務大臣と一緒にあります。ある政治学者が明治憲法下の総理大臣のことを「歴史上日本の総理大臣ほど哀れな存在は稀である」と言つております。

1人でも反対するとも何も決めら

れない、そういう状況でした。しかし、国家として生きて行くには、必ず誰かが最終的な決断をしなければならぬ。最初の頃は、伊藤博文とか明治の元勳達が事実上の政治をしていた。ところが、彼らがいなくなると政治の空白が生じたわけですね。決める人がいない。大正デモクラシーの原敬という人が誕生しますが、昭和に入りますと、政治の空白が大きくなります。そこに軍部が乱入して来たというのが、あの戦争の悲劇を生んだわけですね。そこで日本国憲法はそのような体制を改めようということから、内閣を憲法上の制度にして、そして内閣総理大臣を首長としたわけです。強い立場でリーダーシップを発揮せよと憲法は作ったのです。けれども現実はそのようになかった。なぜか。それは国民の意識という事もあります。明治憲法下の各省は基本的に戦後そのまま残ったんです。勿論、海軍省・陸軍省は廃止されましたし、内務省は占領軍に強く抵抗したことから内務省は解体されました。しかし他の省庁はそのまま残りました。明治憲法下の体制を戦後も引きずってきたということになります。高度経済成長、外交や安全保障という難しい問題を考えるのは止める、それらはアメリカに任せる、高度成長だけに専念するという時は、その体制でも良かったのかも知れません。けれども新しい国際環

境の下で従来のやり方を追求して行くのは非常に難しくなっているわけですね。そこで行政改革で描こうとした国のかたちは、国会によって選ばれた内閣総理大臣が強い指導性を発揮して欲しい、その総理大臣が組織する内閣はもつと凝集力を働かせて政治をやってほしい。いわば内閣主導ですね。その為に内閣官房を強化するとか、内閣を作るとかいろんな仕組みを用意しました。ここで内閣・内閣総理大臣にやって欲しいと願っているのは、政治です。政治というのは何かと言えば、総合戦略、国としての基本方針を作って、いかに実現して行くのかという総合戦略・総合調整・指導性・それについて国民に責任を負うという責任性、それが政治です。こういう政治を復権しよう。政治の力で、もう少し立派になってもらわないと、これからの21世紀の日本は難しい、今までの各省割拠主義では難しいということを考えて、この行政改革の新しい構図を描こうとした訳です。これがその通り、期待したようになって行くか、どうかは今後の国民の意識、つまり従来の政府はお上である。我々は統治される側だという考え方から、統治するのは我々自身だという考え方に転換して、政治がもう少し立派になるように仕向けて行けるか、それにかかっていると言えるのではないかと思います。小泉内閣の誕生という

のは、それに希望を持たせるところがあります。今後どうなっているのか見なければ分かりません。今、行政改革の話をしましたけれども、次に司法改革の話も少しだけしておきます。我々がすぐに役所に頼る、規制してもらおう。規制するというのは保護するという事なんです。すぐに規制し保護してもらいたがるという社会から、国民がより自由で主体的・創造的に活動出来る社会に転換しようという事だと先程申しました。こういう社会が健全な社会として存続する為には、どうしても公正・明確なルールが必要なんです。ルールを作りそのルールをお互いに守って行くことが必要です。事前に不透明なところで行政指導をやるのではなくて、あらかじめ明確なルールを作って、そのルールでもつと自由なやろうではないかというの、これから目指す社会であります。このルールを専門的に扱う存在は、司法であり法曹であります。弁護士を中心とする裁判官・検察官であります。この助けを借りることがどうしても必要であります。我々は身体上の健康について、お医者さんに相談し助言を受けておりますが、これからはもつと個人が責任を持って自立的に生きるべきだと。とは言いましても我々が生きていく上で様々な問題に遭遇します。生きている間は何が起るのか分かりません。その時に

相談出来る存在が身近にいてもらう必要があります。それが実は法曹、司法なんです。弁護士を中心とする法曹は、我々国民の社会生活上のお医者さんなんです。相談事、例えば離婚訴訟とか人間のドロドロしたものや相談する訳です。弁護士というのは、その相談に乗らなければならぬ訳です。裁判官はそれについて適切な答えを出さなければいけない。我々の生活の機微に触れるのが法曹なんです。法曹は、お医者さんと同じように専門技術性が必要であると同時に豊かな人間性と言いますか、教養というものが必要です。私も京大で総長特別補佐として、総長の井村先生と大学で相談するのですが、京大の医学部に入ってくる学生のある割合は、医者にしておくのが本当に困る。何でこんなのが医者になるのか。そういう諸君がいます。京大の医学部ですから、灘高とか限られた4校か5校位になるんです。一番難しいから医学部を受ける。なぜ医者として生きたいのかという事を充分考えないままに医学部に入ってくる。これが本当に困るんです。

「ロースクールがうまくいったら、次はメデイカスクールを創りたい」と井村先生がおっしゃっていました。人間の身体、生き方の機微に触れる、そういう存在ですから法曹というのは、ただ単に専門的知識だけでは駄目なんです。人間性が必要なんです。人間性というのは読書とか様々な活動を通じて身に付いて行くものなんです。専門的技術性と人間性(教養)を持った人に法曹になって欲しい。その為の仕組みとして、どのようなのが良いかと考えて至ったのが、「法科大学院、日本版ロースクール」であります。これは法学部は残りますが、他の学部、経済学や理系からも、どんどんロースクールに入っている。それから社会人、社会に出て働いていた人も法曹になりたいという人は歓迎します。法学部に入った諸君も法律をガリガリと勉強するというのではなく、私は昔一京大の法学部に入った学生で、1年生から六法全書を持って走り回っているヤツは信用しない。初めから法律なんか勉強するな」と言っていたのですが、これからは法学は残りますが、より豊かな教養、政治でも財政でも経済でも文学でも何でもいいのですが、より広く教養を身に付けた上で、自分は法曹として生きたいという人から法科大学院に入って来て欲しいと思います。法科大学院で教育を受けたら7、8割は少なくとも司法試験に通るといって組みを作ろうと思っております。今は司法試験は一発主義です。合格率は一番少なくて一・五%、今でも二・五、一・六%。そうすると大学に入った途端に学部の授業などに出ないで予備校に行くわけです。そうすると、

いかに効率的に覚えて試験に早く通るか。一発試験というのは、どうしてもそういう弊害がある。だから今度は一発試験はやめて、3年なら3年、2年なら2年の過程で必死になって勉強すれば7、8割は通るといって組みを、これから用意しよう。そして法科大学院は何を指すのかというと、知識を詰め込むのではなく、物を見る考え方、この考え方をいかにして養うか。法科大学院でやろうとしているのはそれなんです。小人数教育であらゆる角度から問題を分析して、先生は「こう考えるべき」なんて正解は言わず、考えるための力を鍛えようというの、この法科大学院が目指しているものであります。なぜ、こういう法曹というものがあって、法的なルールというものを大事にしなければならぬのかという事を、もう1点だけ申し上げておきます。身体に心臓、動脈と静脈があります。政治というのは心臓、動脈に当たります。先程申し上げた政治改革、行政改革というのは心臓に脂肪が付いてちよつと弱っている。動脈にはコレステロールが溜まっている。では、それをきれいにしようというのが政治改革、行政改革になります。司法改革というのは静脈。静脈をもつとちんちんと機能させようという事です。なぜ静脈なのか。政治によって法が生み出されます。その法が我々の現実

の生活の中で、どういう生き方をしているか、どういう問題をはらんでいるか。この法は果たして公正なルールと言えるのか。これを最終的には人権を保障している憲法にただして、日本の国として、あるべき法かという事を検証する必要がある。現実の生活の中で携わることが法曹なのです。法的な問題があると弁護士の方に相談に行く。そして弁護士が適切なアドバイスを与える。これで片付けばそれでいい。片付かない場合は訴訟の提起といって裁判所に訴えることになりす。裁判はこういう意味があるのかと言うと、「当事者主義構造」と言いまして、原告と被告、対立する両者がいます。これが真剣に公開の裁判、公開の法廷で議論を闘わす訳です。それで裁判所がどちらの言い分が法に照らして良いのかという事を判断する訳です。相手が大企業であろうと、大労働組合であろうと、政府であろうと、対等な立場で議論する場なのです。政治というのは最終的には力、多数決です。力によって法は生み出されて来るのですが、その法が個人の具体的な生活に対して、果たして適切なものかということを検証するプロセスは絶対に必要なのです。それが静脈という意味です。政治は国会で公開の場で討論され、最終的には多数決で決められる。裁判はこれも公開の場です。当事者主義と構造で議論し

て、どちらが正しいのかということを決める。健全な社会というのは政治も必要であると同時に、法の支配も自由な活力ある社会にとつては不可欠の要素で、車の両輪といつてもいい。或いは動脈と静脈のようなものであります。ところが日本の問題は、この法曹、司法が余りにも小さ過ぎたという問題があるわけです。いかに小さいか、数字だけ紹介しますと、日本の法曹1人当たり国民の数は六三〇〇人という状況です。アメリカは極端で二九〇人に1人法曹がいます。イギリスは七一〇人、ドイツが七四〇人、フランスは、もともと官僚国家で官僚制が強い国ですが、あのフランスでも一六〇〇人に1人の法曹がいます。日本は生活上の身の回りのお医者さんがいかに少ないか。弁護士に相談しようなんて思いつく人は、余りいないのではないのでしょうか。弁護士がどこにいるのか分からない。そういう事では法の支配は困るので、出来るだけ増やさなくては行けないという事です。従来、昭和39年には五〇〇人の合格者を決めて、実に平成2年まで五〇〇人しか合格者を出さない状態が続いて来た。それを審議会では現在一〇〇〇人の合格者を二〇〇一年までには合格者を三〇〇〇人に増やすと。ロースクルの7、8割の合格で三〇〇〇人ですから、とりあえず四〇〇〇人位のロースクールを作ろう

ではないかという話になって、具体的には二〇〇四年にスタートさせるということを目指して、今いろいろと準備しているところでありす。最後に申し上げておきたいのは、法曹を増やすという事を無条件に考えてはいけません。法曹はプロです。プロは高い専門技術を持つ必要があるのですが、プロにはプロの限界が必ずあります。この限界をいかに自覚してもらおうのかという事が、プロ集団を作る時の非常に重要なポイントです。身体上の日本のお医者さんは専門技術的には非常に優れた立派なものだということですが、プロの集団として見た場合には、やはり古い体質が残っているのではないかと指摘されることが多いようです。法曹のプロの集団を沢山作っていくということですが、これが独善化しないように、ひとりよがりにならないようにしていく仕組みを今から用意しておく必要があります。そのために、弁護士会の運営とか裁判所の運営、裁判官の任命等、さまざまに所が国民がもっと深い関心を持って関与していく仕組みを作ろうとしている訳です。そして最後に強調したいのは裁判員制度というものを作ろうとしている事です。これは、裁判官と共に一般の国民が裁判に実質的・主體的に関与して、判決に至るまで関与するという仕組みであります。アメリカなどに出てくる陪

審制に近いものですが、そういう裁判員制度を導入しようとしている。この意味はいろいろありますが、本当に専門家、プロというのは何をやっていっているのかということに国民の目にさらすこと、それから倫理学、哲学の和辻哲郎が戦前書いた本の中で言っていますが、日本人は社会の秩序というのは天から与えられたものだ。人から与えてもらうものだと思っている節がある。安全な社会、豊かな社会をどうやって作っていくか。それについて関心が非常に低い」という指摘をしております。「自分や家族のことでは、ある程度必死になるが、あとは領主が誰になるかが、自分に被害が及ばない限りは関係ないという所が、議会制民主主義を運営していく上では問題なのだ」と和辻さんは言っておられます。

この裁判員制度の意味は、(一般の我々国民が誰が選ばれるかわかりません。選挙人名簿から無作為抽出でやるわけですから無作為抽出でやるわけです。)一般の我々国民が人の運命にかかわる判断を専門プロと共にしなければいけない。真剣に人の事を考えなくては行けない。こういう経験の場を社会として用意しなければいけない。裁判も司法も人事ではない、自分達の問題だという事を考えて頂く契機として裁判員制度を導入しようとしたところでありす。

最後に、詩を紹介して終わりたいと思います。これは行政改革以来、自らを叱咤する思いで、よく話をする時に引用してきた詩であります。アーサー・ヒュークラフ。これは19世紀前半にイギリスで生きた詩人でありす。岩波文庫で「イギリス名詩選」として良い詩を集めたもので翻訳されております。原文も載っておりますから紐解かれたら良いと思います。苦闘を無駄と呼んではならぬ。苦闘というのはストラッグルに対する訳です。悪戦苦闘しても無駄だ。骨折り損だし怪我をするだけだ。敵はいっこうにひるまないし、逃げる気配もない。「結局元の木阿弥だ」などといつてはならない。希望を抱いて馬鹿を見るなら、心配が杞憂に終わることもある。もしかしらたら、ここからは見えない戦場の一隅で、まさに今、君の戦友が逃げる敵を追っているかも知れない。君さえいなければ、勝利は味方のものかも知れない。疲れ切った様子で浜辺に打ち寄せている波も、いくら苦勞しても一歩も前進していないように見える。それでも、ずっと彼方の湾や入り江では、じわじわと、そして黙々と大きな潮が満ちかけているのだ。夜明けの時にしても、東側の窓からだけ光が射してくるのではない。東の空に太陽が昇るのが、どんなに遅々としていても、西の方を見るがいい。天地はもう明るくなっているのだ。

最後の方はキザっぽい言い方になりましたけれども、意のある所を汲んでいただけは大変幸いです。口はばつた事を先輩面して何か偉そうな事を言っていると思われたかも知れませんが、それぞれ自分の胸の中で受け止めて考えて頂けたら大変幸いです。長時間に渡ってご静聴どうもありがとうございました。

同窓会名簿出版案内

本校創立110周年記念事業の一環として、「青山同窓会名簿」を発刊いたします。今年平成十四年が実際の百十年目であり、前回出版した100周年のときから10年目で改訂の年でもあります。

発刊作業は全て第一印刷さんに委託しております。昨年12月25日に第一回目の照会ハガキを送りました。その真偽を問う連絡などを少数ながらいただいておりますので、宣伝を兼ねて要点をお知らせいたします。

- ・同期で住所が不明な方など、まだ間に合います。極力お知らせ下さい。
- ・ご自身の住所変更なども同様です。
- ・名簿購入希望者を募っております。(1冊 5,000円)ご希望の方はお申し込みください。
- ・名簿掲載広告を求めています。こちらは無制限です。ご協力ください。
- ・9月末の完成を予定しております。

上記、連絡は全て第一印刷の専用電話025-283-3785へお願いします。

以上です。いうまでもなく、個人情報保護を最優先にしつつ、最大限正確な、これまでの本校の名簿の集大成を目指していますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

四十八期、月桂樹寄贈

学校の創立百周年に合わせてご自身方の卒業五十周年を祝い、平成四年に「ハナミズキ」をご贈くださった四十八期(代表五十嵐皓太さん)が、この度の学校創立百周年に合わせて卒業六十周年を祝い、学校に「月桂樹」をご寄贈くださいました。

同時に、校舎改築に伴い移植したハナミズキが枯れたため、それを取替えてくださいました。お礼申し上げます。



平成13年度青山同窓会会費納入者追加分 (12月下旬より3月までに納入のもの)

納入先：郵便振替口座 00650-7-4455 青山同窓会

第38回 真柄一衛	中山昌療 第56回	中山弘 矢川和偉 第61回	中村道衛 長谷川潤治 松井光一 第64回
第39回 池田藤三	伊藤泰夫 第58回	浅見昭夫 川崎榮一 佐久間洋一 佐藤敏夫 助川孝雄 長谷川康一 村山国弥 大谷寛彦 第62回	内山武夫 西垣昭彦 星野邦彦 第65回
第46回 伊狩章 手島恵昭	五十嵐治 佐藤俊彦 高橋三男 田野茂光 中川弘義 巻口真義 第59回	青木留蔵 安達正平 岩田亮司 金井正雄 木村望博 後藤近也 近藤琢利 新保利博 鈴木勉 高橋聰一 水野重一 皆川敬介 山崎眞 第63回	村木利夫 佐藤貞夫 柴澤大五郎 関英一郎 水野左敏 吉田治彦 市原民郎 第66回
第48回 鈴木勇 内藤啓一 山田猛	江口昌男 唐津和雄 神田悌三 小松原金二 佐藤進一 高橋剛一 田辺治 日浦恭五郎 藤巻国栄 牧泰彦 吉川文雄 第60回	木下功 小木順一郎 佐々木紀美子 高野弘 星莞一 堀口正和 八木純 山口信 第67回	伊藤陽一 澤口憲一 鈴木喜典 平野茂樹 第70回
第49回 阿部東 江間正三郎 濱博世	江口昌男 唐津和雄 神田悌三 小松原金二 佐藤進一 高橋剛一 田辺治 日浦恭五郎 藤巻国栄 牧泰彦 吉川文雄 第60回	木下功 小木順一郎 佐々木紀美子 高野弘 星莞一 堀口正和 八木純 山口信 第67回	石井堅一 井口禮一 出来島精一 橋本修二 鷺頭宏二 第71回
第51回 斎川正二 嶋田晋	高橋剛一 田辺治 日浦恭五郎 藤巻国栄 牧泰彦 吉川文雄 第60回	木下功 小木順一郎 佐々木紀美子 高野弘 星莞一 堀口正和 八木純 山口信 第67回	今井清治 荻野真太郎 丸山紀子 山田喜英 若林忠一 高橋紘一 第72回
第52回 斎藤茂美 森重郎	高橋剛一 田辺治 日浦恭五郎 藤巻国栄 牧泰彦 吉川文雄 第60回	木下功 小木順一郎 佐々木紀美子 高野弘 星莞一 堀口正和 八木純 山口信 第67回	猪股律子 大塚忠雄 風間誠 渡部五男 第78回
第53回 板津堯彦 高橋勝彦 廣野究 福原和人 山崎典夫	高橋剛一 田辺治 日浦恭五郎 藤巻国栄 牧泰彦 吉川文雄 第60回	木下功 小木順一郎 佐々木紀美子 高野弘 星莞一 堀口正和 八木純 山口信 第67回	青木孝一 滝沢恒世 山口英 第79回
第54回 青木正作 新井勝龍 今井兼智	高橋剛一 田辺治 日浦恭五郎 藤巻国栄 牧泰彦 吉川文雄 第60回	木下功 小木順一郎 佐々木紀美子 高野弘 星莞一 堀口正和 八木純 山口信 第67回	植木一弥 岡田均 第80回

第68回 伊藤昌太郎 加藤健一 駒林進四郎 斎藤正果 佐藤泰二 関口徹雄 田辺紀子 中山紀代子 梁取健 第69回	第73回 小林桂子 第74回 上田隆 金子吉一 鈴木勝紀 森澤盾實 坂上實 第75回 川上滋朗 澤田俊朗 高橋正明 小旗一男 第76回 田宮洋一 森田満 山崎真理子 第77回 猪股律子 大塚忠雄 風間誠 渡部五男 第78回 青木孝一 滝沢恒世 山口英 第79回 植木一弥 岡田均 第80回 伊藤明光 遠藤利光 片山修政	第81回 越野昌芳 渡辺昭雄 第82回 荒川育子 石崎昂一 上ノ山徹 第83回 伊藤恵 鈴木時男 原鍊太郎 第84回 斎藤敬子 丸山祐一郎 村上誠 第85回 笠原哲雄 桑原敦志 筒井敦子 橋本到 第86回 高橋聡子 田中照夫 第87回 大野直子 第88回 石原基規 小池真理 第89回 渡辺智子 第90回 田辺文 渡部幸之助
--	---	--